

蘇った豊田講堂

対談者：福永知義 (株)榎総合計画事務所・取締役
奥村滋夫 名古屋大学施設管理部長
長谷 理 竹中工務店名古屋支店作業所長
聞き手：鈴木信夫 めのはな同窓会広報担当常任理事



鈴木： 本日は、お忙しい中、豊田講堂（とよだ・こうどう）についての解説、及び見学させて頂くためにご足労頂き、有難うございます。千葉大学医学部亥鼻キャンパスには、榎文彦先生が豊田講堂の次に設計した千葉大学記念講堂（以下、記念講堂）があります。今後、色々な意味において、私共の記念講堂をアピールする必要に迫られています。

そこで、改修された豊田講堂を紹介できたらと思います。名古屋大学施設管理部長・奥村様、同施設企画課調査企画掛長・松井様、榎総合計画事務所取締役・福永様、竹中工務店名古屋支店営業部長・青山様、同作業所長・長谷様に来て頂きました。先ず、奥村様から豊田講堂の概要をご紹介して下さい。

奥村： 名古屋大学創立70周年記念事業として平成19（2007）年、豊田講堂の全面改修工事及びアトリウムの増築工事を行いました。豊田講堂は昭和35（1960）年、教育の振興、科学の発展の一助とすることを目的に、トヨタ自動車工業（現トヨタ自動車株式会社）から寄贈されたものです。当時、ワシントン大学の准教授として都市デザインの教鞭を執っておられた榎文彦氏の設計です。この講堂は、名古屋大学の顔、シンボルとして多くの市民に親しまれ現在に至っております。



建設当初の構造規模は、鉄筋コンクリート造、地上3階、地下1階、延べ面積6,270㎡、固定席1,612席です。昭和37（1962）年に日本建築学会賞を受賞、平成5（1993）年には、名古屋市都市景観重要建築物に指定されています。さらに、DOCOMOMO Japan 近代建築100選に選定されたのが平成15（2003）年です。来年は完成後50年を迎えますので、登録有形文化財建造物に申請する準備を進めております。東山キャンパスで、初めての登録有形文化財建造物になると思っております。

今回の改修工事は、建物デザインの保存継承を第一とした外観復元、舞台と客席、及び空調設備の改善を行って機能の充実を図り、音響性能も含めた全面にわたる改修、更に講堂とシンポジオンとの一体化を行いました。その費用は、多くの企業や同窓会の寄付で賄われ、現在に至っています。

新生豊田講堂は、2,000人を越える学生と保護者が集い卒業生を送り出し、新入生を迎え入れています。余談ですが、昭和34（1959）年9月26日、紀伊半島に上陸した伊勢湾台風の影響をまともに受け、建築工事が遅れ、一部未完成のまま、昭和34年度の卒業式を行ったという、エピソードがあります。

建物の名称は、発明家・豊田佐吉（とよだ・さきち）翁を記念する意味で「豊田講堂」とし、額偏は、第3代総長 勝沼清蔵氏の揮毫といわれています。

鈴木： 次に、榎総合計画事務所の福永様より、設計面からの解説をお願いします。

福永： 私共の所長である榎文彦が、日本で最初に設計した建物です。その前に設計したワシントン大学（ミズーリ州セントルイス）スタインバーグホール（図書館・展示・ホール機能を持つ施設）が、1960年に竣工しています。そのホールは、平成18（2006）年に拡張・改修して、視覚芸術学部とアートセンターとしてオープンしました。



豊田講堂の改修に当たっては、建物の外観について出来る限り保存しました。コンクリート打放しの外観は40数年経って劣化していましたので、木の肌を表したコンクリートの表面を打放しで再現する大工事になりました。ホール内部については、比較的響きの良い音響を生かしながら改修すること、椅子を大きくしてゆったりした客席にするようにしました。一方、アトリウムについては、改修前会議棟と講堂の間にあった中庭でした。別棟であった会議棟と講堂を一体化することにより、新しい空間を創り出しました。ホールと一体化する展示場やレセプション会場に利用するなど、色々な用途に利用することが可能となりました。新しくなった豊田講堂が、大学の皆さんやOBの方々に愛され、積極的に利用されていることは、私共、喜んでおります。1960年代のコンクリートの打ち放しを再現した技術的なポイントを、竹中工務店の長谷作業所長に説明して頂きます。

長谷： 私は名古屋大学の卒業生です。学生時代に係わりの深かった豊田講堂を改修することになり、身の引き締まる思いがしました。豊田講堂が完成した昭和35年は私の生まれた年でもあり、改修を終えた今年、私の長男が入学式を迎えるなど、縁の深い建物であるとの誇りを持っています。



講堂正面の軽快な細い柱の表情を、プロポーションを変えずに蘇らせるためのコンクリートの打放し工法は、全社を挙げて取り組みました。具体的には、柱表面から30mmのコンクリートを研（はつ）りとり、55mmの厚さで新しいコンクリートを打込む工法を開発しました。充填性に優れ、薄くても将来の使用にも耐え得るコンクリートを開発して、何回も打設試験を繰り返して技術を完成しました。打放し表面に杉板模様をつけるための型枠は、各地の杉板を取り寄せ比較しました。また、杉板の模様を綺麗に定着させる特殊な処理や、木材自体が持っているコンクリートの初期硬化不良を防止する対策など、色々な工夫と実験を重ねながら、より完成度の高い状態にしています。このような私共の工事に対して、皆様から高い評価を頂いております。

鈴木： どうも、有難う御座いました。私共の記念講堂の稼働率を上げる対策を考えています。豊田講堂の利用者は、大学関係者以外でも利用しているようですが、その点についてお伺いします。

奥村： 名古屋大学は、法人化によって大学の施設をより地域貢献に役立てることであり、豊田講堂を改修するに当たっては、「地域の豊田講堂」との位置付けをしました。そのため、地域の方々から講堂を利用する場合申請して貰い、また、周辺にある小学校や幼稚園などが講堂を利用できるよう配慮しました。改修内

容も、それらに合致する機能を有する施設としています。豊田講堂は、客席数の関係もあり、年間を通じて利用することは少ないのですが、学会や学内の大きな行事のメイン会場として使われています。また豊田講堂は、名古屋大学駅に近く利便性がよく分かり易い所にありますから、最近では地域の方々の利用が多くなっております。

鈴木： 有難う御座いました。蘇った講堂を見学しながらの解説は、動画をご覧ください。



新設したアトリウム



中部建築賞



寄付者顕彰